

ル・コルビュジエの建築作品：近代建築運動への顕著な貢献 ～国立西洋美術館本館～

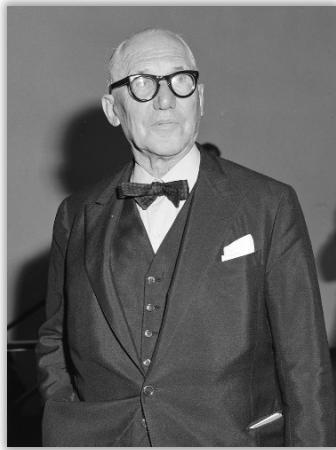


今秋、国立西洋美術館に行ってきました。今、上野（東京都台東区）では、わくわくするような美術展が目白押しです。ムンク、ルーベンス、フェルメール……、有名な芸術家たちの展覧会が同時期に開催されるなんて、何とありがたいことでしょう。作品もそうですが、やはり世界遺産検定マイスターである以上、国立西洋美術館を訪れたなら、世界遺産に登録された「本館」に注目してみたいと思いました。

これまでに国立西洋美術館を訪れた回数は、自分でも驚いてしましますが、実は“数百回”を超えます。仕事ではなく、全てプライベートです。初めて行ったのは、高校1年生の時。美術部だったので、頻りに足を運んでいました。それから30数年経ち、気づけば相当な訪問回数に。今でも年に数回は足を運んでいます。企画展を目的とすることもあれば、常設展だけの場合もあります。慣れ親しんだ美術館は、なんとなく落ち着くんですね。

「国立西洋美術館本館」が世界遺産に登録されたのは2016年で、まだ記憶に新しいところです。登録までには時間を要しましたが、2008年に世界遺産候補としてユネスコに推薦することが正式に決定され、2009年に「情報照会」とどまった時は、正直、難しいのかなあと思いました。当時、上野公園内には「世界遺産へ推薦……」と書かれた旗やポスターが至るところに掲げられていて、盛り上がっていたのを覚えています。その頃の私は、そこまで世界遺産に関心があったわけではありませんでした。国立西洋美術館本館の設計にル・コルビュジエが関わっていたことは知っていましたが、それ以上のことは気にも留めていませんでした。しかし、登録された2016年は、世界遺産検定マイスターの視点で、まったく違うものとなりました。登録以前は、展示作品ばかりに目が追っていましたが、登録決定後は、本館の建物そのもの（＝ル・コルビュジエの作品）や館内の階段や天井、明り取りなど、観る楽しみが増えました。今、世界遺産の中にいる自分にちょっと感動しながら、作品を觀賞しています。

もう何十年も前から気になっていたのは、中3階にある小さな階段です。人が登るには狭すぎるし、昇った先はロフトみたいにも見えるし、いったい何なのだろうと……。いつも不思議に感じます。館内をよく観察してみると、面白いです。展示室や色々な場所に円柱があったり、かなり天井の低くなっているところがあって、その上がガラス張りの明り取りのような部屋（?）になっていたり。外のピロティは、柱すべてが円柱のようです。美術館が四角い回廊のような作りになっているので、この円柱が、柔らかさを醸し出している印象を受けます。また、現代建築のような、あっと驚かすような奇抜さもない、広大な空間もない。しかし、それがかえって、安定感をもたらしていると思います。



ル・コルビュジエ



ピロティ

ところで、ル・コルビュジエ（1887年～1965年）が絵も描いていたのは、ご存じでしょうか。1920年前後に当時流行っていた、キュビズム絵画に近い作品を残しています。キュビズムを代表する画家ジョルジュ・ブラック（1882年～1963年）やパブロ・ピカソ（1881年～1973年）とも親交があり、作品の多くにその影響が見て取れます。

冒頭で数百回訪れたと書きましたが、企画展だけでなく、常設展示だけを観に行ったことも多々あります。また、一息入れたくて、ミュージアムショップで美術書を買ったり、館内のカフェでくつろいだり、私にとって何度も足を運びたい美術館です。飽きない魅力とは、いったい何なのでしょう。居心地の良さでしょうか。充実した作品に加えて、その設計に自然と人を惹きつけるものがあるのでしょうか。斬新なデザインの美術館にも行ったことはありますが、私には1回でもうお腹いっぱいといった感じです。落ち着いた雰囲気美術館の方が、何度も足を運びたいですね。

沼田政弘